

A close-up portrait of Marjane Satrapi, smiling slightly, with dark hair and red lipstick. The background is blurred, showing what appears to be a film reel.

Marjane Satrapi's masterpiece Persepolis transformed the world's understanding of Iran

Published: June 5, 2026 12.04pm BST

Alessandra Tarantino/AAP

マルジャン・サトラピの名作『ペルセポリス』は、 世界のイランに対する理解を一変させた

シャディ・ロウシャバズ

メルボルン大学、ニューカッスル大学、平和・紛争研究博士課程在籍



配信日時：2026 年 6 月 5 日 午後 12 時 4 分（英国夏時間）

原文 <https://theconversation.com/marjane-satrapis-masterpiece-persepolis-transformed-the-worlds-understanding-of-iran-284650>

本人の回想録的アニメ映画『ペルセポリス』で最もよく知られるマルジャン・サトラピが、56 歳で死去した。この広く愛されたイラン系フランス人の芸術家であり、グラフィックノベル作家、映画監督、そして活動家でもあった彼女の死に際し、その生涯、そして抵抗、自由、人間性へと捧げられたその歩みを称える声が広く沸き起っている。フランスのエマニュエル・マクロン大統領は、「イランでの子供時代を普遍的な寓話へと昇華させた偉大な芸術家」と追悼の意を表した。

サトラピは 1969 年、（筆者の実母と同じく）ラシュトで生まれ、その後テヘランで育った。彼女はイラン革命とその後続いた激動の時代に思春期を迎えた。政治的抑圧が強まる中、彼女の家族や広範な社交関係の交友グループのメンバーが逮捕され、迫害を受けた。そして、元政治犯で亡命者であり、イスラム共和国によって処刑された叔父アヌーシュのように、いくつかのケースでは死刑が執行された。



(日本語版はバジリコ社から 2005 年に初版が発売されたが現在は絶版)

2000 年に初めて出版された漫画『ペルセポリス』は、漫画、回想録、そして政治的ストーリーテリングの分野に、変革をもたらす転換を生み出した。最終的に全 4 巻へと拡大されたこの作品は、サトラピ氏の子ども時代、(1983 年に両親が彼女を留学させた) ウィーンでの思春期、そしてイランとヨーロッパの間で自らの帰属意識を模索し葛藤した日々を描いた。サトラピは 1989 年に大学に入学するためテヘランに戻り、1994 年に再びヨーロッパへ移住した。

サトラピは、定住先となったフランスで学業を修め、2006 年にフランスの国籍を取得した。昨年、彼女はフランスの権威あるレジオン・ドヌール勲章の授与を拒否したが、その理由はイランとの関係におけるフランス側の「欺瞞(ぎまん)」に対するものであった。

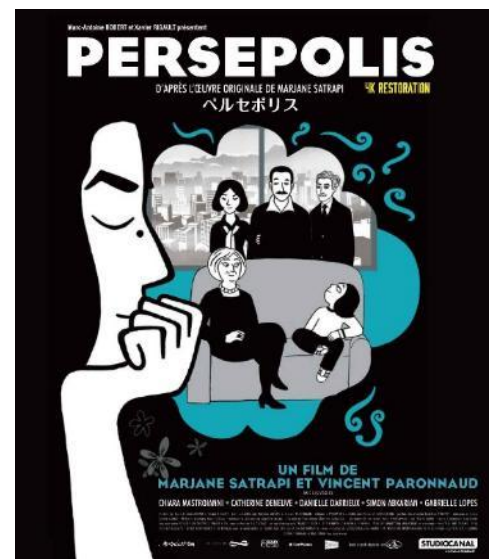
サトラピは、革命、移住、思春期、そして帰国がもたらす心の断絶を、彼女の回想録が母国の枠を遥かに超えて世界に広まるような手法で描き出した。一見すると単純に見える白黒のイラストを通じて、『ペルセポリス』は世界的な影響力を持つに至った。なぜなら、支配的なステレオタイプに異議を唱える、革命期のイランと亡命生活の切実な記録を提示したからである。

多くの読者にとって、サトラピは今なお、最もシンプルでありながら、最も力強い方法でイランを説明してくれた女性であり続けている。

マルジャン・サトラピと共に異なる世界の狭間で育つ

今日、サトラピを偲んで紅茶を淹れ、キャンドルを灯しながら『ペルセポリス』を読む。私は 2019 年にフランスの大学の上映会で初めてこの映画を観た時から、自分の反応がどれほど変わっていないかということに衝撃を受けている。

マルジャン・サトラピと同じように、私も異なる世界の狭間で育った。私は、革命の初期に帰国した両親の子どもであり、義務化されたヒジャブを着用し、西洋の音楽を聴き、権力と議論を交わし、恋に落ち、失恋を経験し、そして地平線の向こうにある人生を夢見た少女だった。その後、私は政治活動、嫌がらせ、移住、そして度重なる亡命を自らの人生に受け入れることとなった。しかし、『ペルセポリス』をこれほどまでに力強いものにした理由は、それが私の抑圧の経験を反映していたからではなく、その先にあるすべてのものを捉えていたからである。



(映画『ペルセポリス』は最近 DVD と Blu-ray が再発売)

サトラピは、イラン人が単なる地政学の対象や権威主義の被害者ではないということを世界に思い出させた。私たちに家族があり、友情があり、ユーモアがあり、ひどいファッションの選択があり、叶わぬロマンスがあり、そして複雑なアイデンティティがある。

すべての偉大な回想録がそうであるように、『ペルセポリス』は特異なものを普遍的なものへと昇華させた。読者がテヘラン出身のイラン人少女の中に、自分自身の姿を見出すことを可能にしたのである。そうすることで、私たちが共有する人間性を否定することを困難にした。彼女の芸術には、誰もがそのどこかしらの片隅に自分自身の姿を重ね合わせることができるような魅力がある。

サトラピの手にかかれば、亡命は英雄的なものでも悲劇的なものでもなかった。それは混沌としており、孤独で、創造的であり、そして政治的に実りあるものであった。しかしながら、彼女が残した不朽の遺産は、自分が後にした国について世界に何を語ったかということに留まらず、一人の人間として異なる世界の狭間で生きる経験について、何を明らかにしたかという点にこそある。

「私はイランでは西洋人であり、西洋ではイラン人だった。私にはアイデンティティがなかった」

『ペルセポリス』の数あるセリフの中で、亡命という状況をこれほど力強く捉えているものは他にほとんどない。

人生の異なる時期に『ペルセポリス』を読むことは、しばしば説明不可能に思える矛盾に対して言葉を与えてくれる。それは、自国を批判しながらも愛すること、複数の場所に属しながらもそのどこからとも完全には受け入れられていないと感じること、そして他者が理解するのに苦心するような記憶を国境を越えて持ち運ぶことである。

自らの物語を語ることで、サトラピ氏は自分自身よりも遥かに大きな何かを捉えた。56年の生涯において、彼女は自分自身に忠実であり続け、自分がどこから来たのかを決して忘れなかった。

イラン：誤解され、非人間化された国

イスラム革命、米国大使館人質事件、イラクとの戦争、そして9.11テロ事件の後に生じた新たな世界秩序を経て、イランは誤解された国となり、その国民の人間性は剥ぎ取られていった。サトラピの回想録は、多様な背景を持つ読者たちの想像力の中に、イランの持つ複雑さと繊細なニュアンスをよみがえらせた。

『ペルセポリス』の持つ力は、まさにその「平凡さ」から生じている。読者は、反抗的な一人のティーンエイジャーの人生を追うことになる。読者は彼女の家族、祖父母、友人、思春期の恋、失敗に終わった結婚、そしてあらゆる食卓を活気づける議論について知る。音楽、ユーモア、そして深い悲しみに彩られたマルジャンの物語は、並外れた歴史的出来事が、いかに日々の平穏な生活のリズムを通じて体験されるかを明らかにしている。



(サトラピの祖母や母親らが語るイラン女性たちの思いを辛辣なユーモアを交えて描く。明石書店、2006年)

しかし同時に、『ペルセポリス』は、慣れ親しんだ環境や故郷を後にすることについての物語でもある。全編を通じて、家族は避難所であると同時に、歴史そのものとなる。

本書の中で最も感動的な場面の一つにおいて、サトラピが深く愛した叔父アヌーシュは、彼女にこう告げる。「私たちの家族の記憶を失ってはならない」。数十年の時を経て、その言葉は私の中で深く響き渡る。その記述を読むたび、私はしばしば自身の叔父カンビズのことを思う。彼は私が生まれる遙か前、23歳の時にイスラム共和国によって処刑され、私は彼を失った。

しかし、この瞬間の持つ意味は、単一の家庭の境界線を越えて広がっている。国家が歴史や記憶を独占しようとしがちな権威主義的な状況において、家族はもう一つの物語の保管者となる。両親や祖父母、親族から語り継がれる物語の中で、サトラピは政治的投獄や抵抗の記憶、そして公式記録が消し去ることを望むかもしれない「希望」を保存しているのである。

アカデミー賞へのノミネート サトラピは一度イランに帰国した後、最終的にフランスに定住し、そこでイラン系移民（ディアスポラ）の中で最も影響力のある論客の一人となる芸術的なキャリアを築いた。彼女は数多くのグラフィック・ストーリーテリング（漫画）の書籍を制作した。

彼女は2007年、アニメーション映画化された『ペルセポリス』の共同脚本と共同監督を務め、アカデミー賞にノミネートされた。これにより、長編アニメーション映画部門でノミネートされた初の女性となった。その後も彼女は、数々の長編映画の監督を務めた。



2007年のカンヌ国際映画祭にて、共同監督のヴァンサン・パロノー氏と共に。キルスティ・ウィグルスワース／AAP

サトラピが提示するイランのもう一つの視点がこれほどまでに説得力を持つのは、彼女が自国を美化することや、ヨーロッパや西洋を理想化することを拒んでいるからである。彼女はノスタルジックなナショナリズムと、完全な同化のどちらも拒絶する。その代わりに、彼女はその間にある居心地の悪い空間に身を置く。

彼女の後に続いた多くのイラン人移民や亡命者にとって、この状況は深く見覚えのあるものである。国を批判しながらも愛すること。複数の場所に属しながらも、そのどこからも完全には受け入れられていないと覚えること。他者が完全には理解できない記憶を抱え続けること。サトラピは、これらの矛盾を共有可能な言葉へと変換した。

彼女はイスラム共和国の抑圧を批判する一方で、西洋の欺瞞に対しても批判的であり続けた。彼女は文化的な優越感に浸ることなく、狂信性を非難した。彼女は『ペルセポリス』の中で、「一方の狂信性と、もう一方の軽蔑の間で、どちらの側を選ぶべきかを知るのは難しい」と記している。

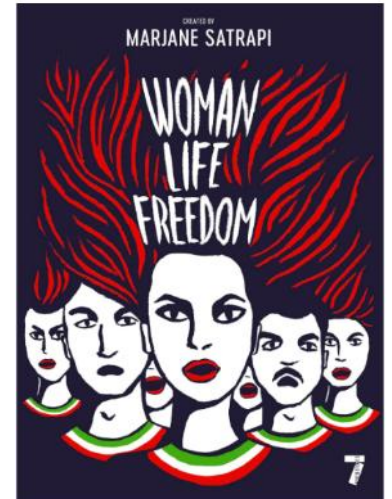
重要なことに、サトラピは決して自分自身をイランの「唯一の声」として位置づけることはしなかった。むしろ、彼女は自らの作品を一種の「翻訳」の形態として捉えていた。イランが地域の紛争、抑圧、そして国内や移民社

会における社会的分断の深化によって特徴づけられる、さらなる不確実性の時代へと入る中、サトラピはイラン人たちの人間性と複雑さを主張し続けた。

彼女の活動には、2022年にイスラム教の頭髪を覆うヒジャブを適切に着用していなかったという理由で拘束され、その後に死亡した22歳のクルド系イラン人女性、マフサ・ジニ・アミニの事件をきっかけに起きた「女性・生命・自由」運動への支持も含まれていた。

彼女の晩年は、イラン国家の権威主義に異を唱えることと、イラン人を歴史や願望、主体的行動を持つ人間としてではなく、地政学的な抽象概念へと縮小しがちな西洋の根強い傾向に挑戦することの両方に費やされた。

《WOMAN,LIFE,FREEDOM》は未訳



幾世代にもわたる亡命者たちへの贈り物

多くのイラン人亡命者にとって、『ペルセポリス』は単なる回想録以上の存在であり続けている。それは一枚の地図なのだ。記憶、アイデンティティ、帰属意識、そして生存のためのガイドである。それは私に、亡命とは単に地理的な問題ではなく、意識の問題であるということを思い出させてくれる。また、政治的健忘症の時代において、尊厳を保つことが抵抗の行為となり得ること、そして記憶することそれ自体が政治的行為になり得るということを、私に教えてくれた。

彼女の物語の登場人物たちが、出国するだけで解放を見出すことはめったにない。むしろ彼らは、孤独や自己の再構築、そして常に付きまとう帰属意識という問いと格闘する。それでもなお、サトラピはこれらのテーマに対して、ユーモアと優しさ、そして複雑さへのこだわりを持ってアプローチした。

マルジャン・サトラピは、人間性、抵抗、そしてイランの記憶が決して忘れられないようにすることにその生涯を捧げた。そうすることで、彼女は幾世代もの読者、そして幾世代もの亡命者たちに、故郷や自由、そして異なる世界の狭間で人間であり続けることの意味を理解するための、より洗練された言葉を授けたのである。

訳注：ほかのサトラピの作品は『鶏のプラム煮』（小学館集英社プロダクション、2005年）がある。サトラピが産まれるよりも前、1958年のテヘランを舞台に、一人のタール奏者が死ぬまでの8日間を描いた作品。これを原作とした映画「チキンとプラム あるバイオリン弾き、最後の夢」がある。YOUTUBEで有料300円で観られる。

